

療育相談センター所長・広瀬宏之先生のひまわり園保護者向けの勉強会
 事例に富んだわかりやすい説明と軽妙な語り口が魅力！

横須賀のバリアフリー子育て情報局
sukasuka-ippo
<http://www.sukasuka-ippo.com>
 発行責任者 / 五本木 愛 編集 / 竹島



子どもの行動のみかた・かんがえかた

横須賀市療育相談センターの通園施設である「ひまわり園」では毎年、障害福祉課や心理士、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士などを講師に招いた保護者向けの勉強会が月替わりで開かれます。そして今回、許可をいただいてレポートするのは療育相談センター所長の広瀬先生の発達障害についての勉強会。年長の保護者にとっては広瀬先生の勉強会も3回目になりますが、『とても簡単なことですが、伝えるのは難しいこと』と先生がおっしゃる通り、聞けば簡単だけど、日常でそれを意識するのは難しい！毎年、聞くたびに新たな発見があります。

■「いい子にしててね」じゃ伝わらない！？

普段の生活でついつい口にしてしまう「いい子にしてね」「優しくできたね」というような表現。でも、広瀬先生によるとこれって子どもにとっては抽象的でわかりにくい表現なのだそう。それを「椅子に座って待とうね」「お母さんにお茶を持ってきてくれたね」など、具体的な行動に置き換えて話してあげると、子どもにすっと伝わりやすいんだそう。

■診察室に入るなり置いてあった時計を抱えてウロウロする子ども…その心は！？

子どもは時に大人にはよく理解のできない行動をとることがあります。例えば、時計の好きな自閉のお子さんが診察室に入るなり時計に興味を示し、時計を抱きかかえてウロウロ…。こんな時、親御さんはどうするでしょうか。「何をやってるの！？やめなさい！」と言いたいところをグッとこらえてその行動の意味を考えてみてくださいと広瀬先生。初めての診察室、知らないお医者さんに不安を感じている時に、その子は大好きな時計を抱えることで心を落ち着けようとしているのかもしれない。発達に凸凹があるお子さんの場合、こうした行動が公共の場では不適切となってしまう場合もあり、怒られてしまうことが多いのですが、お母さんも気持ちの余裕があったら、子どもの行動を楽しんで観察し、理由を考えてみてください。

■「行きたくない！」という言葉の裏に隠れているもの。

子どもに限らず、人間の行動には表と裏があります。例えば、大人でも「会社へ行きたくない！」という場合は大抵、心の中では行かなくちゃいけないと思っているものです。本当に行きたくない時は「行きたくない！」という言葉にすることもなく、もう行かない！それは子どもでも同じです。行動や言葉の「表」だけに反応しないで、その裏側に何かあるのかなと探ることも大切です。

■反抗期は子どもの素晴らしい成長の証し！

3、4歳になるとどこで覚えたのか生意気な口ごたえをしたり行動も変化して、親御さんは大変ですが、実は信頼しているからこそ反抗するんです。子どもは特にそう！

そして、言葉が増えることで「欲しい欲しくない」という要求が「ヨーグルトが欲しい、しかもあのメーカーの…」というように複雑化するのにそれを言葉で伝えられずもどかしい。すると手が出て足が出て声が出る…といった具合。こうした時期は大抵半年ぐらい続き、それが反抗期とぶつかるわけです。これを越えると、次のステップのコミュニケーションに進めるんだそうです。

■これまでできていたことができなくなるのはなんで！？

通常、「できなくなる」ということはありません。多くの場合、「できていた」ことを「しなくなる」のであって、これも成長。園ではするのに家ではないというのも、場面によって使い分けができるようになったことを示しているんです。

■対処行動という視点で子どもの失敗を見てみよう！

行動に理由があるように失敗にもちゃんと理由があります。例えばお母さんを喜ばせようとコーヒを注いでみようとして、ほとんどの場合、それは失敗するわけです。こぼしてしまったコー

ヒーを見てお母さんは怒る！それは仕方ないことですが、子どもが何か失敗をしてしまったとき、怒る前にひと呼吸おいて、失敗の裏にあるお子さんの気持ちを考えてみてください。

■言葉の遅れが心配。言葉のシャワーは逆効果！？

療育相談センターへの相談でも圧倒的に多いのが言葉の遅れについてですが、言葉にこだわらないことも大切と広瀬先生。よく言葉のシャワーとか言いますが、だらだら聞いてもあまり良いことはなく、下手をすると聞き流す練習をしているだけという逆効果になることも。絵本の読み聞かせも、子どもが絵本を読みたがっている、または興味を引き出せるように読むことができるという条件付きで有効です。例えば、子どもは絵を見たくて次から次へとページをめくっているようなときに、「ママが読むんだからちょっと待って！」なんていうのはコミュニケーションのズレを経験することになってしまうのでおすすめしません。言葉は便利な道具ではありますが、うまく使えないときは一段階戻って、一緒に行動したり、遊びや気持ちのやりとりを中心にワクワク感を共有するコミュニケーションの練習をするとういそうです。

■痲癩に特效薬はない。でも理由がある、それがヒント！

例えばむしゃくしゃして机を蹴つ飛ばす…そうすることで気持ちが落ち着くなら自己治療の一種と考えられますが、発達障害のお子さんの場合、どんどん悪循環に陥ることも。そうならどこかで介入して止めてあげる必要がありますが、親御さんが一緒になって感情的になると、火に油を注ぐことになります。不機嫌の原因を探しつつ、外出先なら場所を変える、モノで釣る、どうしても泣き止まないときはそっとしておくのも手です。

■偏食のピークは3～5歳！？

これは基本的には成長を待つしかありません。もちろん、刻んだり混ぜたりというように工夫することはよいですが、小学校1、2年生になると食べられるものが増えるお子さんが多いです。その時期に直らない偏食は、本当に嫌いなものであることが多いので、長期戦を覚悟しましょう。

■皮肉を言うくらいなら褒めないほうがマシ！？

好ましい行動を増やすためにはどうすればよいか。それは、ちょっとでも褒めることです。小さいことでもいいからとにかく褒める。でも、「いつもそうすればいいのに…」なんていう皮肉を言うてはいけませんよ！皮肉を言われるとそれまで褒められた気持ちも帳消しになってしまいますから。

■sukasuka-ippo 隊長・五本木愛の視点

広瀬先生のお話はいつもとても分かりやすく、保護者に障害児を含め、子どもを育てる面白さを教えてくれます。一見、問題行動に見える子どもの行動も、感情的に怒りたい気持ちをちょっと我慢して、その行動や言葉の裏側に目を向けることで、ちゃんとその子なりの理由が隠れていて、それを見つけれられるとお互いに感情的に空回りすることが避けられるよね、というのは、実はつつい忘れがちだけど親が心がけなくちゃいけない視点だなと思います。

広瀬先生のお話は本当にわかりやすくておススメです。今後もsukasuka-ippoの取材で色々なお話を伺いたいと思っています！

